

長野県更埴市

中ノ宮遺跡・南棄水遺跡

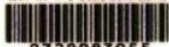
—市道うぐいす線建設に伴う発掘調査報告書—

1001

2002

更埴市教育委員会

信州大学附属図書館



0720083955





長野県更埴市

中ノ宮遺跡・南棄水遺跡

—市道うぐいす線建設に伴う発掘調査報告書—

2002

更埴市教育委員会

例　　言

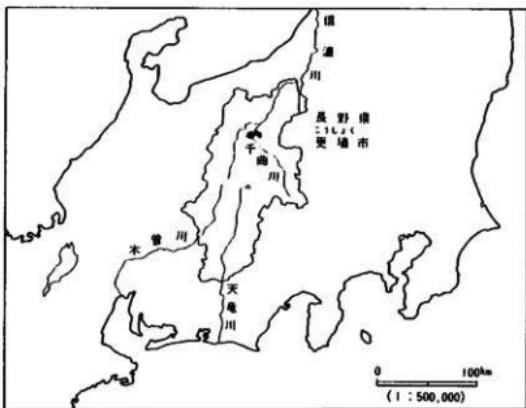
- 1 本書は、平成9年度に市道うぐいす線建設に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集及び執筆は小野紀男が行った。
- 3 現場における実測図は担当者及び国光一穂が作成し、遺物の実測は小野及び国光が行った。
- 4 本文中の遺構、遺物実測図の縮尺は原則的に下記のとおりである。

・遺構： 住居跡1／60 土坑1／30
遺物： 土器1／4 金属器・土製品1／2

- 5 実測図中のスクリーントーン及び断面の処理は下記により表している。

・遺構：	炭化物		燒土	
遺物：	赤色塗彩	赤	黒色処理	
遺物断面：	弥生土器・土師器	白ぬき	須恵器	黒塗り

- 6 住居跡の主軸方向はカマド、炉、または北壁を中心に設定した。
- 7 本書中の方位は平面直角座標系第VII系の座標北を示す。また標高は海拔mで示した。
- 8 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には、各遺跡名を略し中ノ宮遺跡は「NKN」、南棄水遺跡は「MSS」と表記した。



更埴市の位置

目 次

例言・目次

第1章 調査の概要.....	1
第2章 発掘調査に至る経過.....	2
第3章 遺跡の環境.....	3
第4章 中ノ宮遺跡.....	5
第5章 南棄水遺跡	
第1節 概要.....	7
第2節 遺構と遺物.....	9
第6章 まとめ.....	22

写真図版

第1章 調査の概要

- 1 調査遺跡名 中ノ宮遺跡（市台帳No15）
南棄水遺跡（市台帳No152）
- 2 所在地及び 地域
土地所有者 更埴市大字森字北中ノ宮2453-4番地外
長野県住宅供給公社
更埴市
- 3 原因及び 公共事業＝市道うぐいす線建設に伴う発掘調査
事業委託者 更埴市（建設課）
- 4 調査の内容 発掘調査
中ノ宮遺跡 約 100m²
南棄水遺跡 約1,000m²
- 5 調査期間 中ノ宮遺跡 平成9年7月1日～7月6日
南棄水遺跡 平成9年10月1日～11月25日
整理調査 平成13年7月1日～平成14年2月28日
- 6 調査費用 4,899,803円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 矢島宏雄 更埴市教育委員会 森将軍塚古墳館
調査参加者 北沢貞子 国光一穂 倉島七三子 小林昌子 島田昭雄 竹内清志
中條宇め子 西村至誠 西村久林 堀内広人 松林けさよ 宮崎恵子
宮尾剛憲 宮島初枝
- 事務局 更埴市教育委員会生涯学習課（平成9年度文化課）
教育長 下崎文義
教育次長 松下 悟（矢島弘夫 前任者）
課長 柳原康廣（西巻 功）
文化財係長 金井幸二（下崎雅信）
文化財係 佐藤信之 小野紀男（宮島裕明）
- 8 種別・時期 中ノ宮遺跡 敷石地 弥生時代
造構・遺物 出土遺物 弥生時代 コンテナ1箱
南棄水遺跡 集落跡 弥生～平安時代
豎穴住居跡 弥生時代7棟 平安時代5棟
土坑 5基
出土遺物 弥生～平安時代 コンテナ20箱

第2章 発掘調査に至る経過

平成5年7月、市建設課より平成6年度に森地区において道路建設を計画しているとの連絡があつた。当該地は中ノ宮遺跡として周知されている埋蔵文化財包蔵地であるため、同年9月、長野県教育委員会を交えてその保護について協議を行った。その結果、発掘調査を実施して保護に当たることになった。市教育委員会ではこれを受け、調査の準備に取り掛かったが、平成6年度は用地買収のみであるため調査は買収が完了してから実施することとなった。

平成9年2月、市建設課より買収が完了したとの連絡があったため、あらためて調査の準備に取り掛かった。6月9日、調査に先立って試掘調査を実施したところ、北中ノ宮地籍及び南棄水地籍において埋蔵文化財包含層が確認されたため、この地点を中心発掘調査を実施することとした。

7月1日より中ノ宮遺跡の調査を開始したが、当該地は傾斜地であったため、遺構を検出することはできず、7月5日終了した。

8月に入り、長野県住宅供給公社より、市道うぐいす線建設に合わせ宅地造成を計画しているとの連絡があった。公社及び市建設課、市教委による協議の結果、宅地造成に伴う道路部分については発掘調査を実施することとなり、費用についても市道に編入する予定であるため市費により調査を行うこととした。

10月1日より南棄水遺跡の調査を開始した。調査では弥生時代を中心とした集落跡を検出し、大きな成果を収めることができた。11月12日に現場における作業を終了したが、調査地の埋め戻しについて市建設課と協議を行い、平成10年3月15日、埋め戻しが完了した。

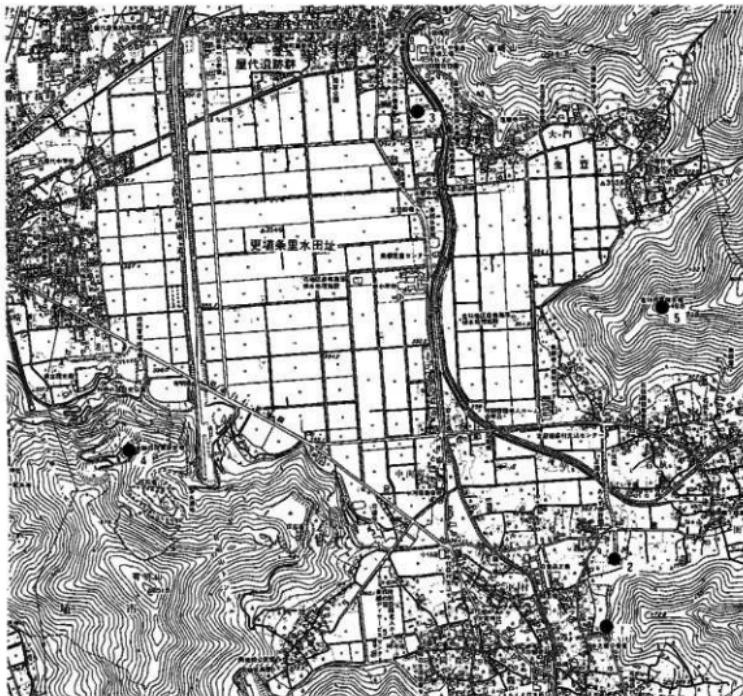
調査日誌

7月1日	中ノ宮遺跡、重機による表土剥ぎ開始	25日	公社市道予定地の表土剥ぎ開始
	作業員入り、検出作業開始	28日	公社市道予定地検出作業開始
5日	作業員本日で終了	11月12日	全体写真撮影
6日	実測を終え中ノ宮遺跡調査終了	18日	実測終了
10月1日	南棄水遺跡の重機による表土剥ぎ開始	25日	機材の撤収を終え、現場における作業を完了する
2日	調査機材搬入		
6日	作業員入り、検出作業開始 最初の住居跡検出		
13日	遺構の掘り下げ開始		
16日	土坑墓検出		
20日	本日より実測開始		
21日	基準点測量実施		

第3章 遺跡の環境

発掘調査地は、東経138度9分44秒、北緯36度31分26秒、海拔365m付近に位置し、長野県更埴市大字森宇北中ノ宮及び南糞水に所在する。遺跡は千曲川が北西から北東に大きく流れを変える部分の山麓に當まれたものである。千曲川の自然堤防上は大きく層代遺跡群として見えられていて、更埴市最大の遺跡群となっている。層代遺跡群からは国府木簡や大型の掘立柱建物跡などが検出されており、周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。自然堤防の南側の後背湿地は「屢代田んば」と呼ばれ、古くから水田として利用されており、地表下約1mには埋没条里遺構が良好な状態で残されている。これらの遺跡群を見下ろす山頂には森将軍塚古墳、倉科將軍塚古墳を始めとする前期から中期の大型前方後円墳が築造されている。

調査地周辺では、平成3年に民間開発事業に伴い南糞水遺跡の試掘調査を実施し、弥生時代の土器片などが出土している。



第1図 遺跡位置図 (1:20,000)

第4章 中ノ宮遺跡

試掘調査により、土器片が出土したことから調査を行ったものである。調査地は南向きの斜面であり、遺物の出土はあったが遺構を検出することはできなかった。調査区内に2本のトレンチを設定して調査を行った。

基本層序（第3図）

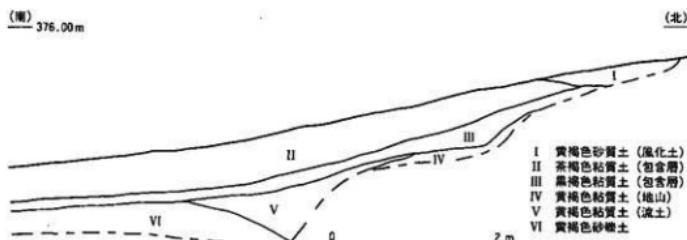
50cm程の表土の下には黒褐色の粘質土が堆積しており、この層より遺物が出土している。その下層は山からの流出と思われる砂礫混じりの土が堆積していた。地表下1.7mまで掘り下げたが、遺構は検出することはできなかった。

出土遺物（第2図）

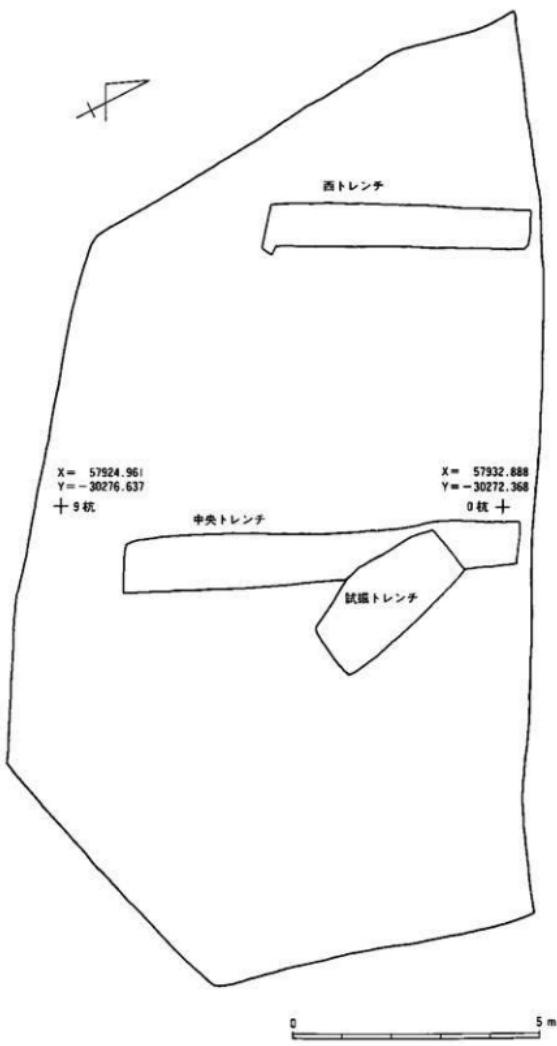
出土量は多くない。また小破片が多く、固化できたものは3点のみである。1～3は甕である。1は口縁部、2は体部であり共に外面には輪描波状文が認められる。3底部であり、中央がわずかに窪み、外面にはハケが認められる。器厚が厚く、平底であるため弥生時代後期、箱清水式土器の甕と考えられる。この他に、赤色塗彩された土器の破片などが出土している。



第2図 中ノ宮遺跡出土遺物



第3図 中ノ宮遺跡土層断面



第4図 中ノ宮遺跡全体図

第5章 南棄水遺跡

第1節 概要

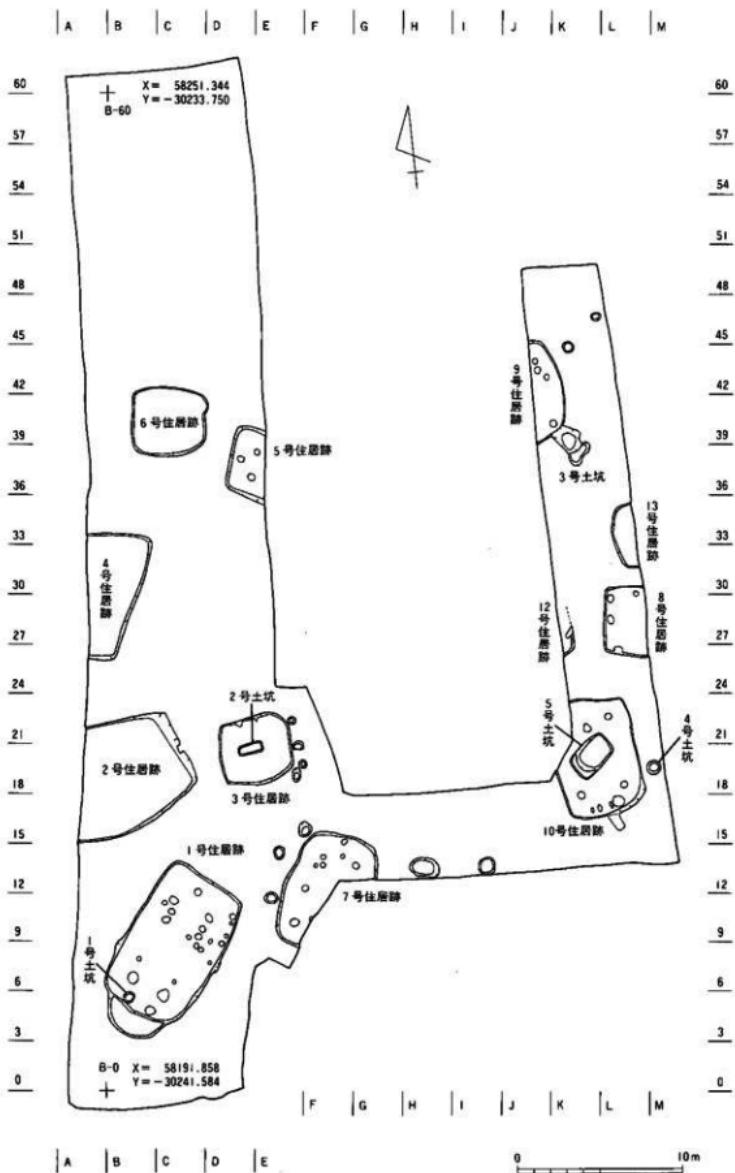
検出した遺構は竪穴住居跡12棟、土坑5基などである。12棟の住居跡のうち、7棟が弥生時代後期、5棟が平安時代に属すると考えられるものである。弥生時代の住居跡のうち、全容を窺い知ることのできる住居跡は3棟のみであるが、いずれも平面形は長方形を呈し、一辺7m以上を測る比較的大形の住居跡である。また、5基検出した土坑のうち、2号土坑は平安時代の木棺墓であり、人骨と共に副葬されたと思われる土器が出土している。

出土遺物は、弥生時代及び平安時代の土器片を中心として総数コンテナ20箱に上る。この中には赤色塗彩された壺や高杯、櫛描波状文が施された甕などが含まれている。しかしながら、調査地の土壤が粘質土を主体とした疊混ヒリ土であったため、出土した遺物の風化、磨滅が激しく國化できたものはそれほど多くない。

弥生時代後期の集落跡は、これまで屋代遺跡群の中心となる千曲川自然堤防上ではあまり検出されおらず、その縁辺部となる沢山川の流域に当たる生仁遺跡などで多く検出されていた。今回の調査地も沢山川の扇状地に接する地点であり、弥生時代後期の集落は、このような比較的山際に近いところに形成されていた可能性がある。



第5図 発掘調査風景



第6図 南淶水遺跡全体図

第2節 遺構と遺物

1号住居跡（第7・8図、図版2・5～7）

位置：B～D～6～15 規模：9.40(10.70)m × 5.75m

平面形：隅丸長方形で南側に半円形の入口施設？が付属 主軸方向：N～40°～E

新旧関係：1号土坑より古

床面：ほぼ平坦であり、黄褐色粘質土を叩き締めた顯著な張床であった。

壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高64cmを測る。また、南壁には半円形の張り出しが認められる。

土層断面を見る限りでは覆土に違いが認められないことから、住居に付属していたものと考えられ、入口等、何らかの施設があったものと思われる。住居の規模は9.40m × 5.75m程であるが、この施設を含めると10.70m程になる。

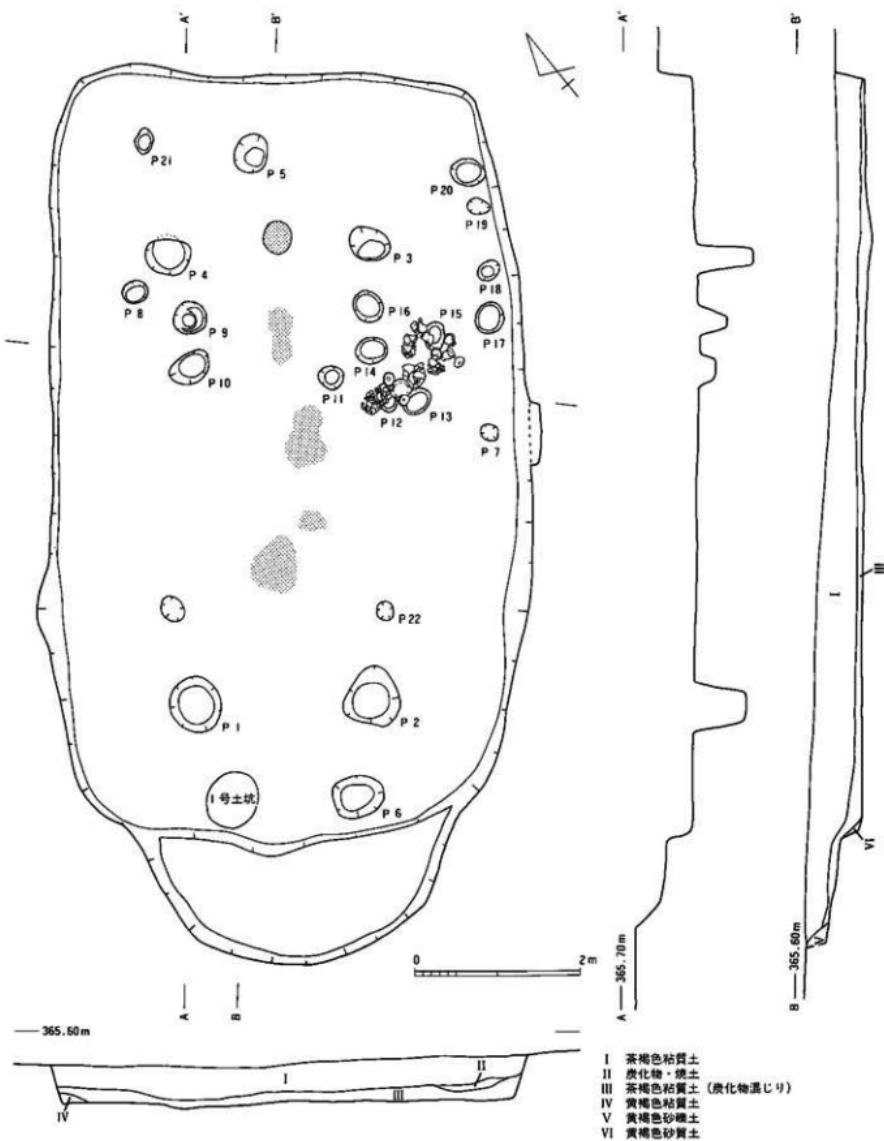
柱穴：住居内から23基のピットを検出している。このうち、主柱穴になると考えられるものはP1～P5である。いずれも直徑70cm前後で、床面からの深さ70cm前後を測ることができる。その他のピットは小形のものが多く、床面の焼土を切って掘り込まれているものもあることから、住居に伴うものではないものも含まれていると考えられる。

覆土：大別して2層に分けることができるが、いずれも茶褐色の粘質土であり礫を含んでいる。また、床面には比較的広範囲に焼土が認められるため、焼失住居であった可能性がある。

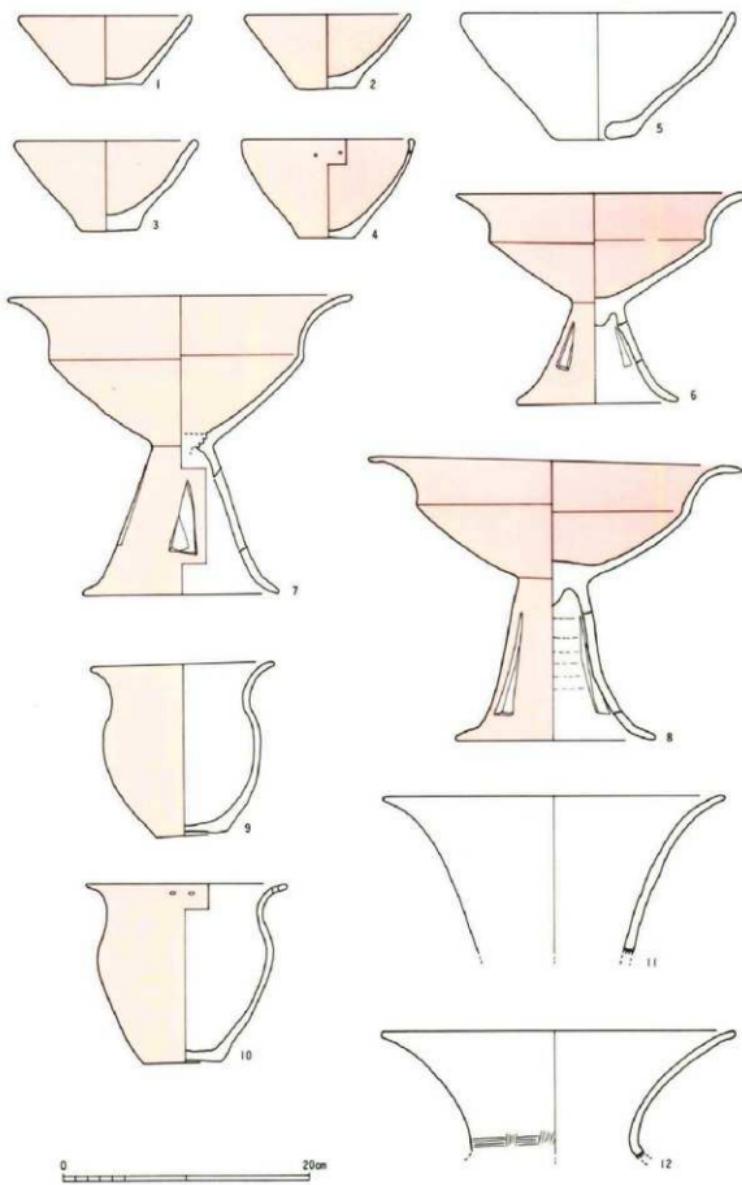
炉：住居内北側から1基検出している。P3～P5で形成される三角形の中心付近に作られている。直徑40cm程の地床炉であり、中心部がわずかに掘り込まれている。

遺物：出土量は多いが風化、磨滅が激しく小破片となっているため、出土量の割には固化できたものは多くない。また、固化した遺物の多くが住居内東寄りのところから一括して出土したものである。1～4は鉢であり、内外共ヘラミガキ及び赤彩される。1～3は底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるのに対し、4はやや内わん気味である。また4には直徑2mm程の穿孔が2孔穿たれている。5は有孔鉢であり、底部には直徑2cm程の円孔が穿たれている。器面の風化が著しいが、赤彩は認められない。6～8は高杯である。いずれも坏部中程に稜を持ち、そこから口縁部が大きく外反する形状をしている。また、脚部には三角形の透かしが4方向に穿たれている。外面と坏部内部をヘラミガキ及び赤彩する。9、10は小形壺である。外面は丁寧にヘラミガキされ、赤彩されている。10の口唇部には直徑5mm程の円孔が2孔穿たれている。11、12は大形の壺の口頭部であり、12の頭部にはT字文が施されている。両者共器面荒れが激しく、赤彩の有無は不明である。13～19は甕であり、このうち13、14は台付甕である。頭部には簾状文、口縁部及び胴部には波状文が施されているが、19の頭部には簾状文が認められない。13、18の胴部下半にはハケが認められる。17、18は甕が比較的大きく膨らみ、頭部のくびれが明瞭であるが、16は胴部の膨らみが小さく、くびれも明瞭ではない。20、21は筋縫車であり、20が石製、21が土製である。

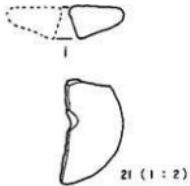
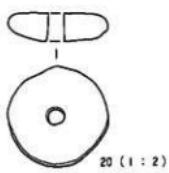
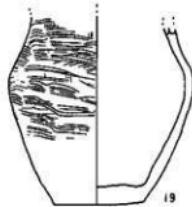
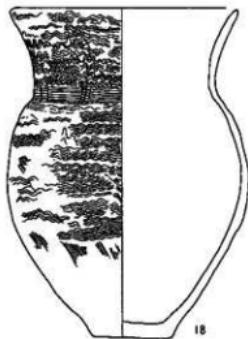
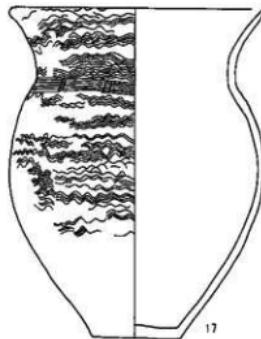
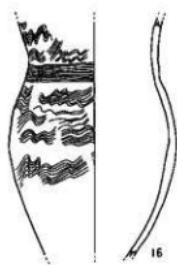
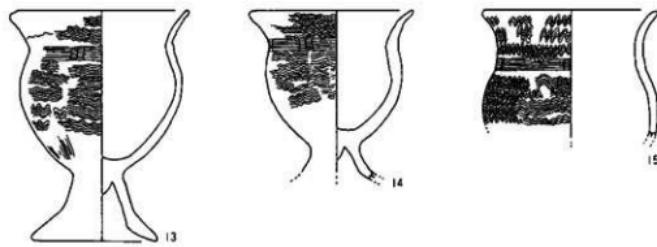
本住居跡は、出土した遺物がすべて弥生時代後期、箱清水式土器の特長をもったものであり、古墳時代的な要素を持った土器類は出土していない。このため、当該期の典型的な住居跡と言ふことができよう。



第7図 1号住居跡



第8图 1号住居跡出土遺物1



0 20cm

第9図 2号住居跡出土遺物2

2号住居跡（第10・11図、図版3・7）

位 置：A～C-18-24 構 模：5.30m × 8m以上

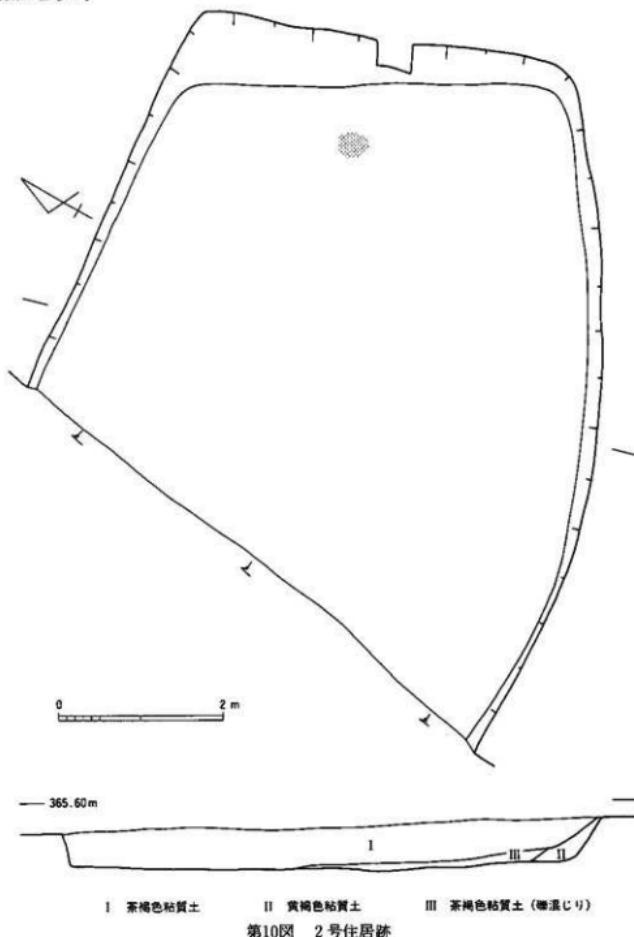
平面形：隅丸長方形 主軸方向：N-60°-E 新旧関係：なし

床 面：ほぼ平坦であったが、あまり明瞭ではなかった。

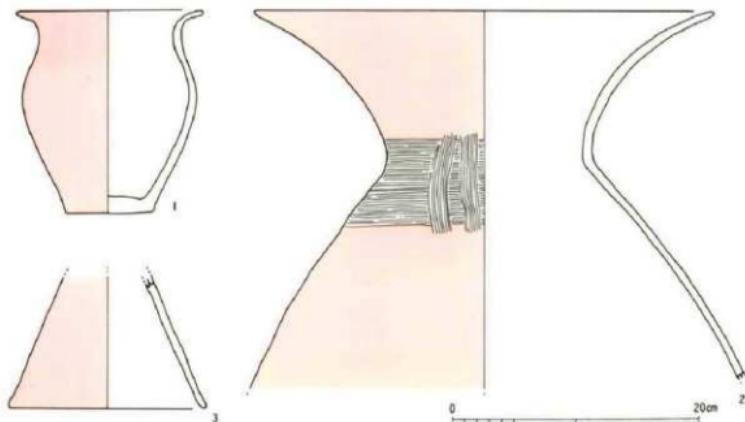
壁：立ち上がりは不明瞭で東壁は検出の際に破壊してしまった。最大壁高40cmを測る。

炉：東壁際ほぼ中央より検出した。直径40cm程の地床炉であるが、掘り込みは認められない。

遺 物：出土量は少ない。1は小形の壺でヘラミガキ及び赤彩される。2は大形の壺である。頸部にはT字文が認められ、文様帶以外の外面は赤彩されている。3は高坏の脚部であり、赤彩されるが風化、磨滅が著しい。



第10図 2号住居跡



第11図 2号住居跡出土遺物

3号住居跡

(第12・13図、図版3・8)

位 置：D・E-21・24

規 模：4.20m×3.95m

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-10°-W

新旧関係：2号土坑より古

床 面：ほぼ平坦であり、黄褐色粘質土の顯著な張床であった。

壁：ほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高25cmを測る。

カマド：北壁中央より検出した。

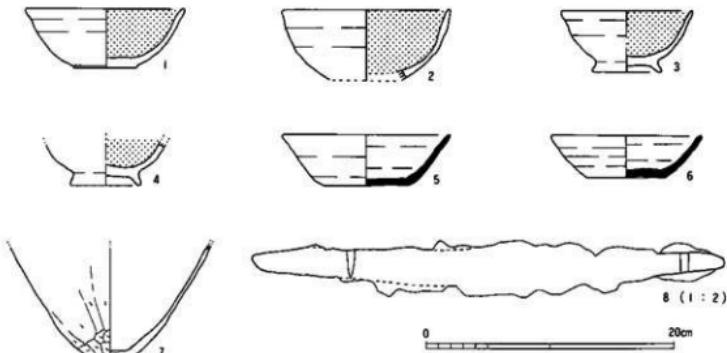
袖は黄褐色粘土のわずかな高まりとして残っているだけであった。

良く焼けた火床内から支脚石が出土している。煙道は検出することできなかった。



第12図 3号住居跡

遺 物：出土量は少ない。1～4は土師器壺である。いずれも内面黒色処理されており、1の底部には回転糸切痕が残っている。3、4には比較的足の長い高台が付いている。5、6は須恵器壺であり、いずれも底部には回転糸切痕が残っている。7は武藏甕の底部である。外面はヘラケズリされており、器厚が非常に薄くなっている。8は刀子である。全面鏽に覆われているがほぼ原型を保ち、全長20cmを測ることができる。



第13図 3号住居跡出土遺物

4号住居跡（第14・15図、図版8・9）

位 置：A・B-27-36 規 模：7.65m × 平面形：隅九方形

主軸方向：N-15°-E 新旧関係：なし

床 面：ほぼ平坦であり、黄褐色粘土の張床であったが部分的に残っているだけであった。

壁：やや角度を持って立ち上がり、最大壁高50cmを測る。

柱 穴：不明

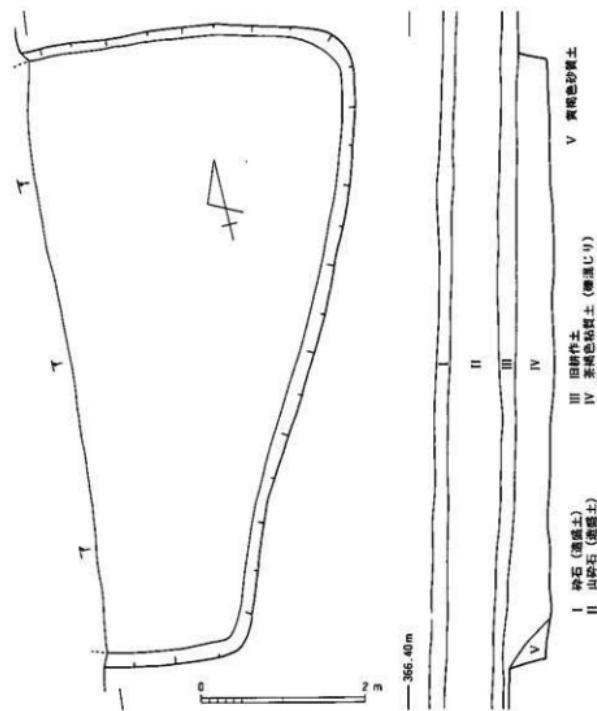
覆 土：2層に分けることができる。IV層は茶褐色の粘質土であり、礫を多く含んでいる。また、壁際には黄褐色粘質土であるV層が三角形状に堆積している。

炉：不明

遺 物：出土量は比較的多いが、図化できた遺物はそれほど多くない。1、2は小形の高杯である。

1はほぼ完形であり、口径に対して非常に深い杯部をしている。外面及び杯部内面を赤彩する。3、4は大形の高杯である。杯部は直線的に立ち上がり、口唇部が強く外反して鉗口状になっている。脚部はラッパ状に大きく広がっている。4の頸部には突帯状に粘土紐が貼り付けられているが、装饰的なものか、あるいは接合部の補強のためであるかは不明である。外面及び杯部内面を赤彩する。5は壺である。頸部には横描文及びT字文が認められ、文様帶以外の外面は赤彩される。口縁部及び底部を失するが頭部のくびれが比較的緩やかであり、胴の膨らみもそれほど強くない。また、胴下半部のくびれも認められない。6～9は甕である。いずれも頭部には簾状文、口縁部及び胴部には波状文が施されている。8の口頸部は若干「コ」字形に屈曲している。9は大形の甕であり、内面はヘラミガキされている。

本住居跡の出土遺物は弥生時代後期、箱清水式土器の特長を持ったものである。鉗口状口縁を呈する高杯は、有段口縁の高杯よりも先行するものと考えられているため、1号住居跡よりも先行する時期の住居跡と考えられる。



第14図 4号住居跡

5号住居跡 (第16・17図、図版3・8)

位 置 : D・E-36~42

規 模 : 4.10m ×

平面形 : 四角形

主軸方向 : N-20°-E

新旧関係 : なし

床 面 : ほぼ平坦であり黄褐色粘土を張って床としていたが、礫が多く混じっていた。

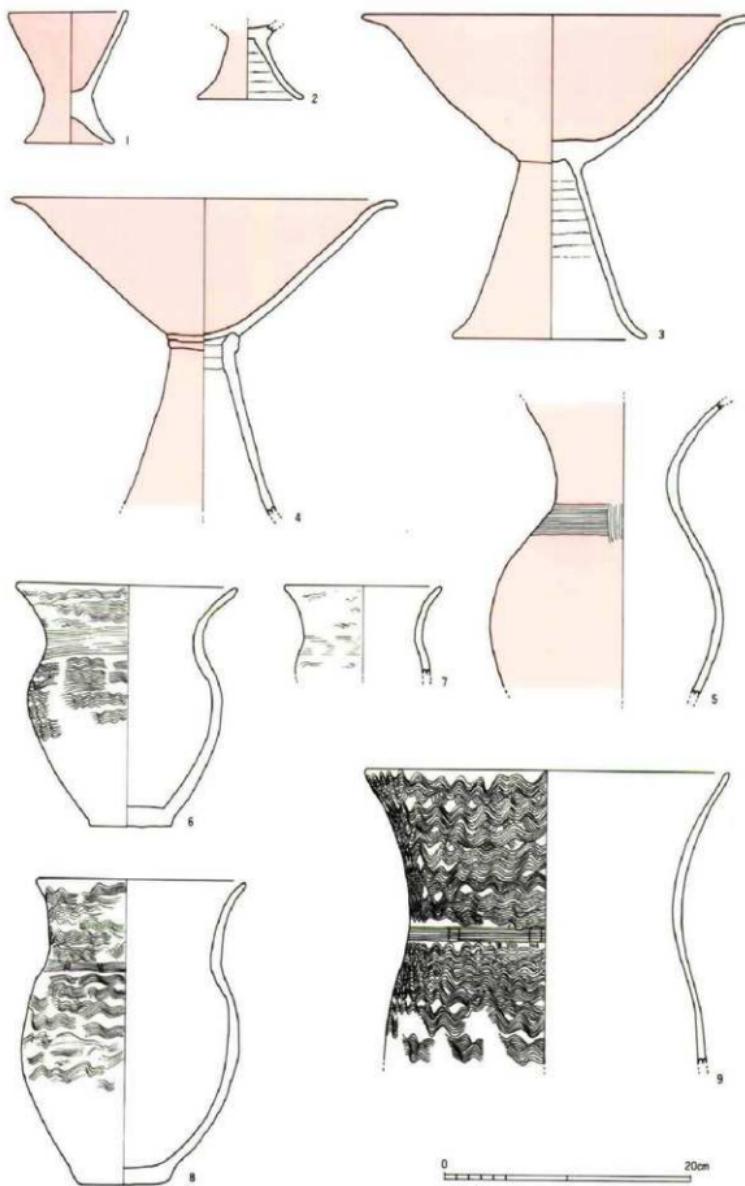
壁 : 立ち上がりは緩やかであり、最大壁高35cmを測る。

柱 穴 : 3基検出した。P1~P3は主柱穴になるものと考えられ、いずれも直径40cm前後、床面からの深さ45cm前後を測る。

炉 : 中央付近から検出した。直径30cm、深さ10cm程の地床炉と考えられるが、あまり焼土化はしていない。

遺 物 : 出土量は多いが小破片が多く、図化できたものは少ない。1は高环である。脚部はラッパ状に大きく開くが透かしは認められない。外面は赤彩されるが、内面は器面荒れが著しく赤彩の有無は確認できない。2は壺である。2の胴部下半には明瞭なくびれが認められ、このくびれより上は赤彩される。3はその形状から甕と思われるが器面荒れが著しいため、詳細は不明である。

本住居跡は出土遺物から弥生時代後期、箱清水期の住居跡と考えられる。



第15図 4号住居跡出土遺物

7号住居跡（第18・19図、図版4・9）

位 置：E～G-12～18

規 模：7.35m × 4.80m

平面形：隅九長方形

主軸方向：N-25°-E

新旧関係：なし

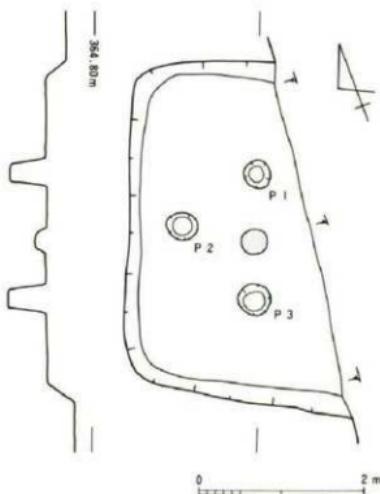
床 面：北側に向かって若干下がっているが、黄褐色粘質土を叩き締めた顯著な張床であった。

壁：立ち上がりには角度があり、最大壁高45cmを測る。

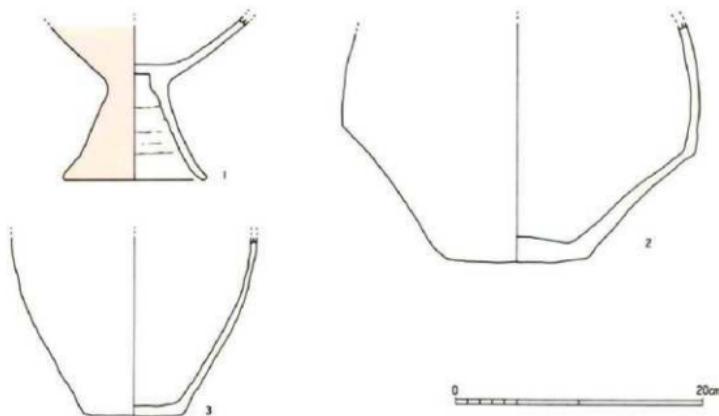
柱 穴：住居内から9基のピットを検出している。主柱穴になると考えられるものはP1～P4である。直径40cm～50cm、床面からの深さ45cm前後を測る。柱穴の配置から6本柱になるものと考えられる。

炉：3基の地床炉を検出した。3号炉には掘り込みが認められるが、1、2号炉には認められない。

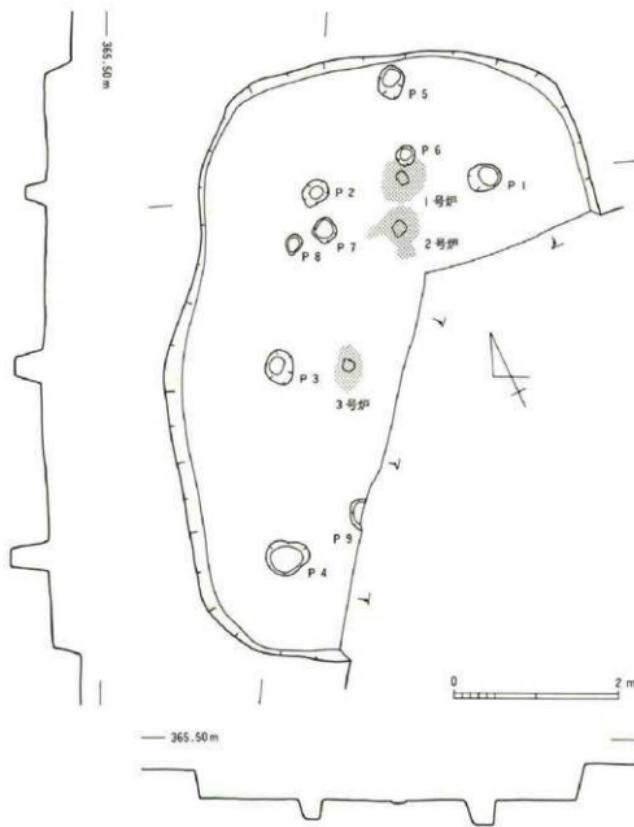
遺 物：出土量は多いが小破片が多く、図化できたものは少ない。1は高環の環部であり、内外面共赤彩される。2、3は小形壺の底部であり、外面は赤彩される。4は有孔鉢である。内外面共粗いヘラミガキが施されているが、赤彩は認められない。5は台付甕である。頸部には簾状文、口縁部及び胴部には波状文が施されているが、波状文は乱れている。



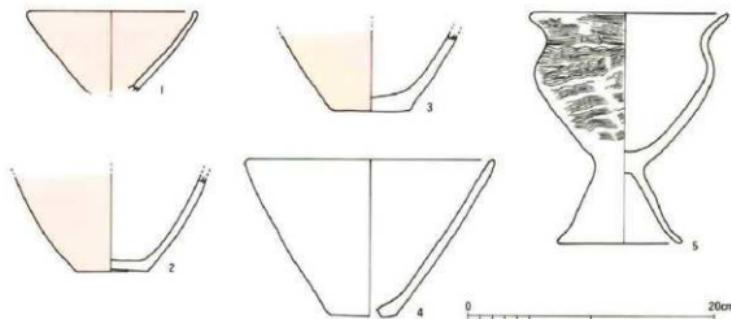
第16図 5号住居跡



第17図 5号住居跡出土遺物



第18図 7号住居跡



第19図 7号住居跡出土遺物

10号住居跡（第20・21図、図版10）

位 置：K・L-18~24

規 模：7.25m × 4.80m

平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-5°-W

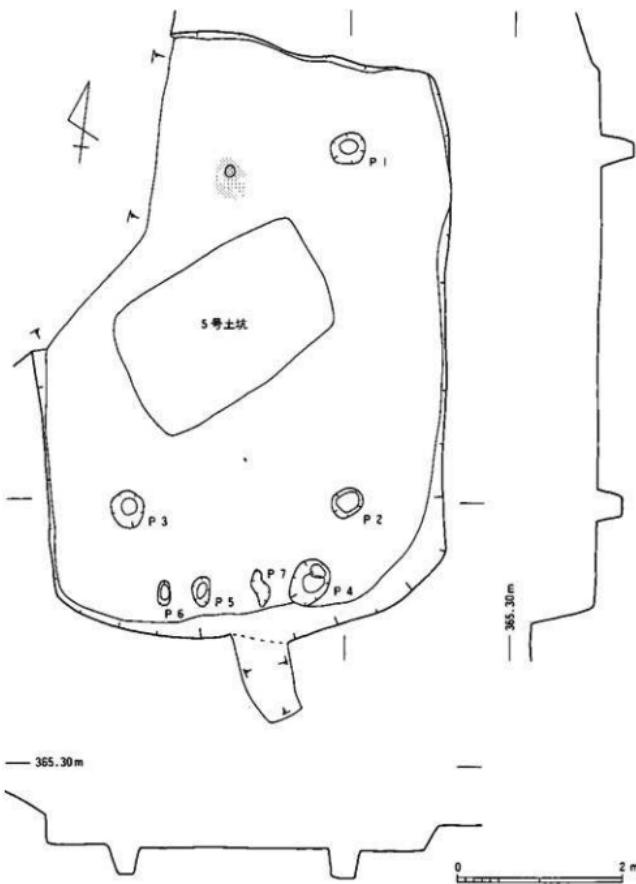
新旧関係：5号土坑より古

床 面：ほぼ平坦で、顯著であった。

壁：立ち上がりには角度が認められ、最大壁高75cmを測る。

柱 穴：7基のピットを検出している。主柱穴になると考えられるものはP1～P3である。いずれも直径40cm前後で床面からの深さ40cm前後を測る。柱穴の配置から4本柱であったと考えられる。

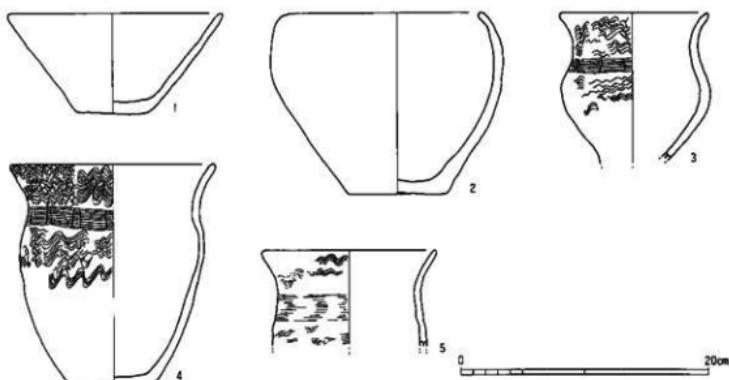
炉：住居内北側中央から検出した。直径約50cmの地床炉であり、掘り込みは認められない。



第20図 10号住居跡

遺物：住居の大半を検出したが、出土した遺物の量は多くない。1は鉢である。器面荒れが著しく、調整及び赤彩の有無は不明である。2は大形の鉢である。口縁部は内わんし、波状口縁となる可能性がある。器面荒れが著しいため調整は不明である。3～5は甕であり、3は台付甕である。頸部には簡状文、口縁部及び胴部には波状文が施されている。

本住居跡は出土遺物から弥生時代後期、箱清水期の住居跡と考えられる。



第21図 10号住居跡出土遺物

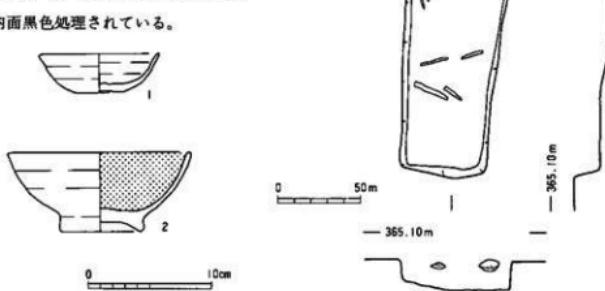
2号土坑（第22図、図版4・10）

位 置：D・E-21～24 規 模：1.75m×0.60m 平面形：長方形

主軸方向：N-80°-E 新旧関係：3号住居跡より新

構 造：3号住居跡掘り下げ時に検出したものである。平面形は長方形を呈しているため、木棺墓であったものと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、最大壁高15cmを測る。頭蓋骨及び四肢骨の一部が残存していたが残りは悪い。

遺 物：頭蓋骨の周囲から完形に近い土器が出土している。1、2は共に土器器坏であり、2は内面黒色処理されている。



第22図 2号土坑及び出土遺物

第6章 まとめ

調査地は東部山地から流れ出た沢山川の扇状地上に形成されたものであり、これまであまり調査の手が加えられていなかった地域である。千曲川沖積地の大遺跡群となる屋代遺跡群とは地形的に連続しているものであるが、屋代遺跡群ではあまり検出例のない弥生時代後期を中心とする集落域を検出することができた。以下、今回の調査で注目された点についてふれ、まとめとしたい。

検出した弥生時代後期の住居跡は7棟である。いずれも箱清水式土器の特長を持ったものであり、古墳時代的な要素を持ったものは含まれていない。出土遺物の組成により若干の時期差を認めることができると、箱清水期の典型的な住居跡と言うことができよう。また、出土遺物の中には中期後半となる栗林式土器の破片はまったく出土していない。

全掘できた住居跡は1号住居跡のみであったが、この他に4号住居跡からも比較的まとまった量の遺物が出土している。1号住居跡出土遺物の中には坪部に一段の明瞭な稜を持ち、そこから口縁部が大きく開く形態をとり、脚部に三角形の透かしを持つ高坏が出土している。また、4号住居跡からは坪部が直線的に立ち上がり、口唇部が短く外反する鰐口状口縁を持った高坏が出土している。この高坏の脚部に透かしは認められない。1号住居跡で出土したような有段口縁高坏は箱清水期の中でも後半に入ってから成立したものと考えられており、この時期に属すると考えられる住居跡は屋代遺跡群土口バイパス地点や生仁遺跡などで検出されている。一方、4号住居跡で出土したような鰐口状口縁高坏は、有段口縁高坏よりも先行して成立したものと考えられており、屋代遺跡群内ではほとんど検出例がなく、千曲川を挟んだ対岸の八幡地区にある舞台遺跡等で検出されているにすぎない。これらのことから、当該地周辺では弥生時代後期、箱清水期の比較的早い段階から集落が成立し、後半段階まで存続していた可能性が指摘できるだろう。屋代遺跡群では数はそれほど多くないものの、弥生時代中期の住居跡は検出されている。しかしながら、箱清水期の前半に位置付けることのできる住居跡はほとんど検出されていない。このような中にあって、本調査により箱清水期前半の住居跡を検出したことは、当該期の集落の展開を考えるに当たって興味深い資料になるものと思われる。

住居跡の構造についても注目される。1号住居跡の南壁からは半円形の張り出し部を検出している。住居跡の覆土との違いは認められず、また炉の対辺に当たる位置であるため、入口等何らかの施設であったものと思われる。弥生時代後期の住居跡の中には壁が楕円形に張り出し、そこに小形の柱穴が付属する例が知られており、入口に関わる施設と考えられている。1号住居跡検出の張り出し部もこのような入口に関わる施設である可能性が高いと思われるが、非常に大きなものであり、また上屋構造を推定させるような柱穴も検出していないため、別のものであった可能性も否定できない。

最後に今回の調査に当たり、関係の皆さんのご協力に対し深く感謝申し上げ、まとめとします。

写 真 図 版



調査地遠景
(北側より)



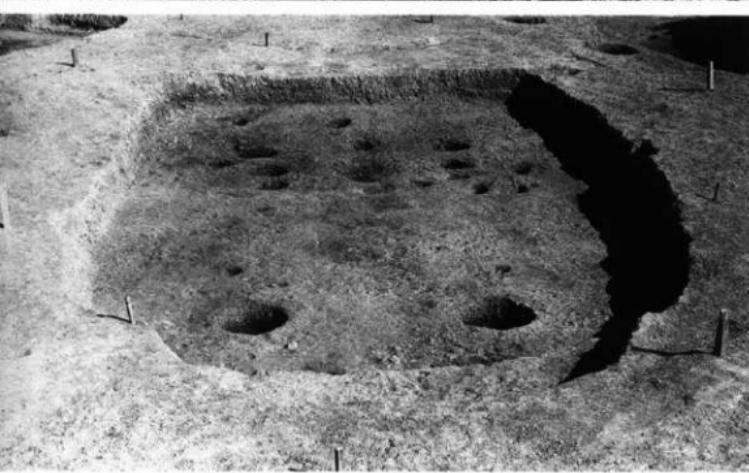
中ノ宮遺跡全景
(南側より)



南東水道跡調査区西側
(南側より)



南堀水道跡調査区東側
(北側より)



1号住居跡
(南側より)



1号住居跡出土状況
(北側より)



2号住居跡
(西側より)



3号住居跡
(南側より)



5号住居跡
(北側より)



1号住居跡出土遺物





9



10



11



12



13



14



18



19



20

2号住居跡出土遺物



2

图版 8

3号住居跡出土遺物



1



5



2



6



3



4

4号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物



1



2



3



4

4号住居跡出土遺物



7号住居跡出土遺物



図版 10

10号住居跡出土遺物



1



3



4

2号土坑出土遺物



1



2

報告書抄録

ふりがな	なかのみやいせき・みなみせせなぎいせき
書名	中ノ宮遺跡・南葉水遺跡
副書名	市道うぐいす線建設に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小野紀男
編集機関	更埴市教育委員会 生涯学習課 文化財係
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL 026-273-1111
発行年月日	2002年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中ノ宮	長野県更埴市大字森 字北中ノ宮、南葉水	20216	15 152	36 31 26	138 9 44	19970701～ 19971125	1,100	市道うぐいす線建設に伴う 発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物			特記事項	
中ノ宮 南葉水	散布地 集落	弥生時代 平安時代	竪穴住居跡 土坑 墓	7棟 5棟 5基 1基	弥生土器、土師器、 須恵器			弥生時代後期、 箱清水期の集落跡

中ノ宮遺跡・南葉水遺跡

発行日 平成14年2月28日

発 行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105
